

要約

ムージルの『特性のない男』における〈家族の発見〉

——〈比喩〉の具現としての親和性——

博士学位 請求 論文

2008年2月29日 提出

一橋大学大学院 言語社会研究科

言語社会専攻 博士後期過程

学籍番号 LD9911

布川 恭子

本論【ムージルの『特性のない男』における〈家族の発見〉——〈比喩〉の具現としての親和性——】は、ローベルト・ムージルRobert Musil〔1880—1942年〕の未完の大作『特性のない男』*Der Mann ohne Eigenschaften*（第一巻1930年、第二巻部分1932年）における「親和性／親戚関係」Verwandschaftのモチーフを明らかにしていく。

この未完の小説の「終わり」を考察するさいには、これまで第二巻の主人公ウルリヒとその妹アガーテとの二人の關係に焦点があてられて論じられてきた。これは小説中でも問題となっている「キョウダイシマイ愛／同胞愛」Geschwisterliebeの問題である。

しかし注意せねばならないのは、そもそもウルリヒは、アガーテのみならず、ほとんどすべての登場人物たちに——イトコのディオティーマや彼女のプラトニックな恋人アルンハイム、幼馴染のヴァルターやその妻クラリッセ、ひょっとしたら恋仲になりえたかもしれないゲルダやその現在の恋人ハンス、また淫楽殺人者あるいは精神異常者モースブルッガー等々に——、キョウダイシマイ的・同胞的な感情を、親和性・親戚關係の感情を喚起されていることだ。

「血縁」、「親戚」、「類似性」でもある「親和性」の關係は、小説中にあらわされる概念「比喩」Gleichnisの關係を具体的に解き明かす鍵をなしているのではないかと本論は考える。この「比喩」とは、ウルリヒが小説第一巻のなかで、自らの「生」Lebenを考察するうえできわめて重要な役割を担っている概念である。

ウルリヒは、第一巻でエッセイ的に生きようと志している。あらゆる事物には二面性があるが、これを悟性で把握しようとするとき、ひとはなんらかのかたちで限定や譲歩をすることによって、一義的に解釈しようとする。これに対して、ここでいわれる「エッセイ」Essayは、事物の二面性を、一回限りにおいて全的に把握しようとするユートピア的試行であるという。

換言すると「エッセイ」とは、限定された現実に対して、諸々の可能な多様性を手に入れること、したがってあらゆる可能性をいちどきに体験可能にすることという「試み」であり、ある人間の内的な「生」が、ある決定的な思考を介して取る一回的で変更のきかない形姿であるとされ、また「エッセイスト」の王国とは、宗教と知識、実例と学説、知性的愛と詩との間にあり、彼らは宗教をもつと同時にまたざる聖者であり、時として彼らは冒険の途上で道に迷った男たちにすぎないこともあるのだともいわれている。

このエッセイズムが矛先を向けるのは、「同じことが起こる世界」、特性のある人々が闊歩している世界である。そこでひとは、「物語の糸」や「悟性による遠近法的短縮」と呼ばれる、「境や切れ目を見えなくする」手法で生きている。これらの概念であらわされているのは、物事を因果性にしたがって論理的に解釈していくありかたである。つまり、あのときあれが起こったために、いまのこれがある、といった調子に、物事を解釈していくやり方だ。しかし、本来事物はばらばらに点在しているのであって、これを取捨選択していくことには、欺瞞や省略が必然となる。

そうしてウルリヒは「正確さと不正確さの結びつき、厳密さと情熱の結びつき」を可能にするというエッセイのための表現形式を探していた。そのうち、彼は「比喩」のありようのなかに、この不可能な結びつきを可能とする可能性を発見し、しばしばこれに従事する。比喩においては、「文学（虚構）と現実」に分けられてしまったものの「不可能な結びつき」が可能になるからだ。このエッセイの表現形式を模索するウルリヒは、あるとき「比喩」のうちにその答えを見出す。だが、「生の根源的な状態」とされる「比喩」は、小説のなかではほぼ抽象的に考察されるのみだ。

この「比喩」を具現化しているのが、小説中の登場人物たちの構図にみられる「親和性」の関係、擬似家族的関係なのではないかと本論は分析した。ムージル自身が、第二巻で登場するウルリヒのシマイであるアガーテが「比喩」であると構想に記している。またこれまでの研究では、この比喩を具現化しているのが、「忘れていた妹」アガーテであり、彼女とウルリヒとの「兄妹愛」なのであるという見解が圧倒的である。しかしムージルは、アガーテのみならず「モースブルッガーは比喩である」とも記している。アガーテとウルリヒとの二人の関係だけに焦点をしばることで、小説が志向する「可能性の限界」を理解することはできないのではないか。

ウルリヒとアガーテは年齢が違ってもかかわらず、自分たちを「ふたご」、それも「シヤム双生児」と呼ぶ。また他の登場人物間においても、血縁関係がないにもかかわらず、それぞれが「キョウダイ」、「シマイ」である（あるかもしれない）といった感情を喚起されることがある。ウルリヒとアガーテの「兄妹」の関係のみを分析しては、小説にはりめぐらされている（上下のない）キョウダイシマイ的關係の可能性、また現実としてのヒエラルヒー的（擬似）親子関係の構図は把握できない。これを本論はイマジネールなキョウダイシマイ的平等な地平（比喩の世界）を志向するものと捉え、分析を試みた。

本論は三部構成となる。

第一部【**比喩と親和性**】では――補足において『特性のない男』の成立やあらすじをみたのち――、第一章：同じことが起こる（第一節：問題提起および先行研究、第二節：家族の構図）において、小説で問題となっている比喩について、および登場人物たちの好悪感の構図を、（擬似）家族の構図として分析した。これにより、いつの時代も「同じことが起こる」という悪循環にあること、しかしそれぞれが本当は親子という憎しみ合う上下関係ではなく、キョウダイシマイという平等なありかたを望んでいることを明らかにした。

「同じことが起こる」という千編一律の世界では、それぞれが、ある種の「典型」のなかに関係づけられるている。「特性のない男」ウルリヒが考察されていくが、注意したいのは、彼を主人公として特別視しないことである。ウルリヒが、他の登場人物たちと一線を画している（いられる）のは、彼が所謂「生からの休暇」をとっているからにすぎない。換言するならば、他の登場人物たちも、過去には「特性のない」者であったかもしれないし、未来に「特性のない」者になるかもしれない、という可能性を潜在させていることを、考察していかねばならない。

第二章：生からの休暇（第一節：生の本木の樹、第二節：恋愛と友情）では、小説における「生」の問題をみた。ひとは現実においては分裂した生を営んでいる。これがかつて一致したのは、恋愛および友情においてである。ここにおいてもまた「同じこと」に組み込まれていく契機がある。

現世では、ヴァリエーションをつけられながら、いつも繰り返されているものがある。それぞれひとは、以下のように分裂している。すなわち、1) 現世での「特性」を持った自分と、2) その自分の影になっている、通常は姿を現さない自分である。ヴァリエーションが生じるのは、1) における生い立ちや人間関係などによる。しかしこのヴァリエーションですら、現世が要求する役割を演じていくことによって、個人をあらわすのではなく、いわゆる「典型」のなかに入ってしまう。

ここから抜け出すのは、現実には根を下ろしたが最後、通常難しいものである。もし抜け出すとしても、酩酊状態や狂気、犯罪の状態という限界的なケースでしか可能ではない。しかしウルリヒのように「生からの休暇」をとった状態においてもまたこれは可能であり（これは、以下より見ていくように危険な状態になるのだが）、また誰しも友情や恋愛などにおいて、一度はこれを体験している。

本章では、小説で問題となっている「生」について第一節で、その後これをひとが体験するという友情や恋愛について第二節でみていく。現世における生が典型づけられるのと同様に、ここではまた違った意味で個性のなくなった、他者と溶け合う高揚状態がみられることが明らかとなる。

小説『特性のない男』および主人公「特性のない男」であるウルリヒは、これまでの自分の「生」が、「愛と暴力」という二つに分裂して進んできたと感じていた。ここで「暴力」という語で意図されているのは、対象を厳密に論理的に一義付け定義していくこと、数学者たるウルリヒにとっては「数学」である。他方「愛」に関しては、かつて少佐夫人との恋愛において（少佐夫人によってではない）、目覚めさせられたもの、そして忘れられたものである。この愛は、相手を所有しようと欲することを許さない、そして自分自身をも放棄させるものである。これによって遠く離れた恋人と、また事物と自己が、至福の合一感を抱くことが可能となったものだった。

自身の今後を熟考するため、ウルリヒは一年間「生からの休暇」を取ることになる。しかしこの休暇をとりはじめてから、彼の分裂はまさに表面化してくる。彼の「生」は危機的状況に陥るといふ。そういった状況でウルリヒは、実際には血縁関係にない人物達に、親和性／血縁性を喚起させられるようになる。仲間を求める気持ちと、そういった気持ちを抱いた相手に対する反発を感じるという。

このウルリヒが感じていた分裂はしかし、他の登場人物達も感じている。「同じことが起こる」世界ではだが、キョウダイシマイ的な平等な関係を望みながらも、千篇一律の悪循環のなかで、親子的なヒエラルヒーのなかへと組み込まれていかざるをえない。

ウルリヒは、この「休暇」をとりはじめてから、彼の「生」の危機的状況に気づく。彼は分裂しているといわれるが、これは比喩的にいわれているのみならず、小説中には、具体的に「二人のウルリヒ」が肩を並べて歩いている情景が記されている。

登場人物すべてが、実はこの分裂をかかえている。この分裂が顕現化してこないのは、

彼らが「現実感覚」をもって、悟性的に現実に対処しているからである。これができないモースブルッガーの場合は、やはり具体的に「二人のモースブルッガー」が現れてくることになる。また、完成稿では狂気の一步手前にいる——構想においては、その後狂気へと至り、病院に收容されることになる——クラリッセも、自らのなかに、またすべての事象のなかに「二重の有様」をみることになる。

第二部【千年王国へ（犯罪者たち）】では——補足として遺稿の状態および成立段階をみたのち、小説の構想を、第三章で「キョウダイシマイ愛」および「熾天使の愛」、第四章で「キョウダイ愛」および「シマイ愛」、第五章で「ドッペルゲンガー」および「ピュグマリオン」の順番で整理し考察している——第三章：キョウダイシマイ愛と熾天使の愛（第一節：キョウダイシマイ愛〔(1)【遺稿】1921—1930年、(2)【遺稿】1930—1932年、(3)【遺稿】1932—1935年〕、第二節：熾天使の愛〔(1)【完成稿】1930・1932年、(2)【遺稿】1930—1932年、(3)【遺稿】1932—1936年〕）、第四章：キョウダイ愛とシマイ愛（第一節：キョウダイ愛〔(1)【遺稿】国家、(2)【遺稿】大衆・戦争、(3)【遺稿】リントナー〕）、第二節：シマイ愛〔(1)【遺稿】アガーテ、(2)【遺稿】対象のない愛、(3)【遺稿】蠟人形・袋小路〕）、第五章：ドッペルゲンガーとピュグマリオン（第一節：ドッペルゲンガー、第二節：ピュグマリオン）。

『特性のない男』を論じる際に「キョウダイシマイ愛」が取り沙汰されるが、この語は完成稿に一度も登場していない。ひとが「キョウダイシマイ的なもの」を求めるのには、「熾天使の愛」と呼ばれる「シマイ愛」が関与しているとウルリヒは述べている。現実には達することができない「シマイ愛」の代替として、「キョウダイシマイ愛」が求められていると考えることができるだろう。しかし代替であるがゆえに、この愛は現実において、第一部でみたように、変容してしまう。

「熾天使の愛」であるところの「シマイ愛」は、「セクシュアリティのない愛」、「対象のない愛」であるとされ、悟性でもって事物を把握しようとする「キョウダイ愛」を受け入れないものといわれる。

「キョウダイ愛」それ自体は「徳」を持っているのだが、これが光を放つのは生まれる

瞬間のみで、以降は現実目標を設定してこれに向かっていくという性格を持つことが構想の変遷によって理解できる。

小説後半においてはそれゆえ「キョウダイ愛」は、「同胞愛」「祖国愛」そして「戦争」へと向かうコンテクストを包含している。他方しかし「シマイ愛」は対象のないものであるだけに、袋小路に行き着く。ここからまた屍姦や露出狂などの病的なものが生じさせかねられない。

こういった理想の愛の現実化の過程での変容を考察するさい、また「ドッペルゲンガー」および「ピュグマリオン」のモチーフが晩年に浮上してきている。これらは「キョウダイ愛」や「シマイ愛」が現実化した（する）さいの一つの可能性であるが、いずれにせよ純粋なかたちではない（これをいかに変容させずに保持することができるかについて、本論第三部で分析を試みている）。

以下の表は、この第二部で順番にみていく「キョウダイシマイ愛」、「熾天使の愛」、「キョウダイ愛」、「シマイ愛」、「ドッペルゲンガー」、「ピュグマリオン」のそれぞれの語が、成立史的にいつどのような文脈で登場しているかをあらわしたものである。

	I Geschwister *	II Seraph*	III Bruder*	IV Schwester*	V Doppelg*	VI Pygm*
[1] 1921-22 1923-24 1923-26 1926-27	01 01			01 E 01 E 01 E 01 E		
[2] [M.-Entw] 1927 1927-28	02 02					

1927-30	04		04 C×4	02 E×2	02	
1928-29	01					
1928-30			01 C			
1929-30						
[小計]	[11]	[0]	[05]	[06]	[02]	[0]
[3]						
[M. Bd.I]		04				
1930	05	08			01	
1930-31	03	01	01 C	01 F		
1930-32	02					
1931-32	11	05	02 A×2	06 D×5 , F	03	04
1932	05	05	02 B, C		01	
[M. Bd.II]		02	03 A×2 , C	01 D	01	01
[小計]	[26]	[25]	[08]	[08]	[06]	[05]
[4]						
1932-33	01	01	05 B×5			
1932-34		01	02 A×2	02 D×2		
1933-34	01	09	02 A , B	03 D , F×2	01	
1934	02	12	07	04 D×4		
1934-35	08	01	A×4 B×3	04 D×4	13	01
1935-36		01	05 A×5			
[5]						
1937			01 C		02	
1937-38					06	01
1938			02 B×2		08	
1939				01 F	01	
1940-41					01	01
1941						05
1941-42						01

〔小計〕	[12]	[25]	[24]	[14]	[32]	[09]
合計	49	50 (06)	37 (03)	28 (01)	40 (01)	14 (01)

「キョウダイシマイ愛」は、初期の1921から1930年の間に11回構想にみられるが、ここでのキーワードは自己の孤独、これを癒すものとしての「自己愛」であるといえる。遺稿中期1930から1932年のあいだに「キョウダイシマイ愛」は、26回登場する。しかしこの間に公刊された完成稿においては、この語は用いられていない。袋小路、戦争といった方向性に向かうことがこの時期の遺稿から読み取れる。後期、第二巻一部を公刊した1932から1935年までの間には、キョウダイシマイ愛は12回登場している。ここでは諸々の愛が現実のものとなることで変容をこうむることが記されている。

これ以降は登場しないのは、ムージュルの問題意識が、シマイ愛などにより深化されていたため、つまり、キョウダイシマイというものだけでは十分ではない（熾天使の愛へ、そしてシマイ愛とキョウダイ愛へとつながっていく）ためであると本論はとらえ、分析を試みていった。

遺稿の変遷をみると、年代的にまず「キョウダイシマイ愛」の考察からはじまり、順に問題が深化されていくことがわかる。最終的に行き着くのは、ピュグマリオン的デカダンスあるいは病的ともいえる状態になる。

ドッペルゲンガーは、はじめは「異性における」と限定づけられているが、しだいにこういった性別を超えたものとして意図されていく。そこではいわば大衆あるいは全体と一体化するといった方向性がみてとれる。これはキョウダイ愛の変性であるともみることができるだろう。

一方でピュグマリオンに係わるモチーフは、シマイ愛が行き着く一つの形となる。この人形愛や屍姦にも通じてしまうモチーフもまた「同じことが起こる」世界へと向かってしまうことになる。

第三部【家族の発見】では、『特性のない男』におけるイマジネールな親和性／親戚関

係の問題、他者のなかに「家族を発見する」こと、また現実の家族のなかに可能性としての家族（現実の妹に、可能性としてのふたごのシマイ、シャム双生児の片割れを見出すこと）を発見することの意味を考えていく。

第六章：部分と全体（第一節：フラクタルな世界、第二節：構成的イロニー）では未完の小説の「部分」と「全体」をどのようにとらえるか、ムージルはどのように読まれることを欲していたのかを考察する。

ウルリヒの「生」の分裂は、第一部みたように登場人物達それぞれが抱いているものだった。遺稿でみたウルリヒとアガーテのキョウダイ愛およびシマイ愛の問題も、他の登場人物達にあてはまる。すべての人々が分身状態にあり、この分身状態の人々の祖国カカーニエンにも同様の分裂がみられるからだ。ここにはフラクタル的構造（第一節）がみられると同時に、ムージルのいう「構成的イロニー」の手法（第二節）が重要な役割をなしている。

ムージルは『特性のない男』を、「部分」と「全体」と二回読んで欲しいと記している。これは一体なにを意味しているのかだろうか。本論は、以下の二点が、ここで重要な問題となっていると考える。

1) 「部分」が「全体」を、また「全体」が「部分」を取り込んでいる、入れ子式にも似た構造に着眼すること。ウルリヒのみならず、カカーニエンの構成員それぞれは分裂しており、またカカーニエンという国もそれ自体が分裂している。この構造には、フラクタルとの類似がみられる。フラクタルとは、ある「全体」の「部分」を取り出すと、この「部分」のなかに「全体」のミニチュアが入っているもの、同じ構成要素（＝「自己相似」）によってすべてがなりたっているものである。

2) 小説を「全体」としてとらえることで切り捨てられた「部分」に注目すること。悟性によって、すなわち「物語の糸」でとらえて小説を「全体」として読むと、個々のわからない「部分」は切り捨てられてしまう。わからない部分とは、モースブルツガーの章や彼に異常な関心を寄せるクラリッセの章になる。また他にも、目立たないかもしれないが、前後の脈絡が矛盾している箇所、唐突な描写もあるからだ。

上記二点は、しかし、互いに関連し合っている。ウルリヒやクラリッセのみならず、カカーニエンの構成員もモースブルッガーに関心を持っている。彼等にとってこの関心が突出しないのは、彼等が日常におり、特性のある生活を送っているからだ。彼等がモースブルッガーに思いを馳せるのは、夜、寝室である。「生からの休暇」を取っているウルリヒや、狂気の一步手前にいるクラリッセには、モースブルッガーはより揺さぶりをかける存在となる。ゆえに、すべてのひとは本当は「特性のない男」になりうる可能性を秘めていることになる。

これらについて本章は、まず第一節でフラクタルを導きとして考察していく。しかしフラクタル的理論の解釈では、第一巻の【同じことが起こる】世界は考察することはできても、未完の第二巻については、明言することはできないのではないか。そのため、第二節では、ムージル独自の手法「構成的イロニー」を考察することにより、ムージルが意図した「部分」と「全体」の関係をみていくものとする。

「構成的イロニー」とは、登場人物たちの既存の関係の糸を切り、それぞれ孤立していることを認識させ、しかし実は、それぞれが「親和性／親戚関係」によって結ばれている、あるいは結ばれる可能性を内在させているのだというこをあらわす、エッセイ的志向であり、これが明らかにするのは、ドッペルゲンガーの問題になるのといえるだろう。

第七章：分けられないが一つにもなれない者たち（第一節：家族を発見すること、第二節：所有欲の前形態）では、「分けられないが一つにもなれない」という比喩の状態について考察する。この状態でひとは、上下関係のない、平等なイマジネールなキョウダイシマイ的な親和性の地平に至ることになる。とはいえ、通常これはまた【同じことが起こる】悪循環へと向かってしまう。

ウルリヒはアガーテに「家族を発見」するという。彼らは発見するまでもなく兄と妹という家族の関係である。ここで意図されているのは第二部でみてきたように、熾天使的なイマジネールな愛を可能にする「家族を発見」することだろう。つまり、兄や妹という上下関係のないキョウダイとシマイとなり、イマジネールなものとして肉体やヘルマアフロディーテとして性別も超越し、そこで二人は「分けられないが一つにもなれない」という比喩の状態を感得することになる。

しかしこの状態を持続させることは通常困難である。第一節では登場人物たちそれぞれ

が互いにイマジネールな家族を求めていること、特に小説第二巻における、その試みと挫折の軌跡をみていく。

比喩の具現化としての親和性／親戚関係の関係は、なかなか具現化しないもの、したとしても変容してしまう運命にある。ではどうすればこれを回避することができるのだろうか。第二節では、『特性のない男』およびその前身となる小品『家族の発見』のうちの一人の登場人物である「おばさん」を導きとして、これを考察していく。

ディオティーマと同様、「おばさん」はウルリヒとは血縁関係にはない。彼女は子どもたちのピアノ教師として、彼のオバの家に来た人物だ。ここでもまた、『特性のない男』に固有の関係性の構図を、幼馴染と親戚／親和性関係をみることができる。別の登場人物たちに対するこのジェーンとの関係の進展はしかし、逆の方向に向かっている。すなわち、雇われ人から幼馴染へ、非親戚からオバへと逆に向かうのだ。これを可能にするのは、ジェーンのありようである。曰く、彼女の精神的内容はおそらく大きくはなかつたろうが、それを包んでいた魂の形式はとても美しかったとされる彼女の態度は、英雄的だったとされる。そういう態度は、内容が偽ものであるかぎり、不愉快なものになるのだが、内容が完全に空であれば、ふたたび燃え上がる炎と信仰のようなものになるの、とされる。

この「所有欲の前形態」とムージルが名指した状態において、ひとびとは互いにキョウダイシマイ的なものとして存在することが可能となるのだ。

以下は本論の目次である：

記号

序章

第一部：【比喻と親和性】

* 補足：『特性のない男』について

第一章：同じことが起こる

第一節：問題提起および先行研究

第二節：家族の構図

第二章：生からの休暇

第一節：生の二本の樹

第二節：恋愛と友情

第二部：【千年王国へ（犯罪者たち）】

* 補足：『遺稿』について

第三章：キョウダイシマイ愛と熾天使の愛

第一節：キョウダイシマイ愛

(1) 【遺稿】 1921－1930年

(2) 【遺稿】 1930－1932年

(3) 【遺稿】 1932－1935年

第二節：熾天使の愛

(1) 【完成稿】 1930・1932年

(2) 【遺稿】 1930－1932年

(3) 【遺稿】 1932－1936年

第四章：キョウダイ愛とシマイ愛

第一節：キョウダイ愛

(1) 【遺稿】 国家

(2) 【遺稿】 大衆・戦争

(3) 【遺稿】 リントナー

第二節：シマイ愛

(1) 【遺稿】 アガーテ

(2) 【遺稿】 対象のない愛

(3) 【遺稿】 蠟人形・袋小路

第五章：ドッペルゲンガーとピュグマリオン

第一節：ドッペルゲンガー

第二節：ピュグマリオン

第三部：【家族の発見】

第六章：部分と全体

第一節：フラクタルな世界

第二節：構成的イロニー

第七章：分けられないが一つにもなれない者たち

第一節：家族を発見すること

第二節：所有欲の前形態

終章

文献